

2月9日「イスラエルは停戦合意を守れ！ガザに人道支援を！集会&デモ」

メッセージ

「イスラエルは停戦合意を守れ！ガザに人道支援を！集会&デモ」にお集まりの皆さん、パレスチナの人びとへ心を寄せて下さり、変わらない力強いご支援に感謝します。

ガザの人びと、ヨルダン川西岸、エルサレム、イスラエル国内、そして北隣のレバノンに難民としてに住むパレスチナの人びとに代って、お礼を申し上げます。

ガラスのようにもろい、と言われている「停戦」です。それでも戦闘機や爆発の音に脅かされる日々が止まったこと、廃墟になっているかも知れないけれど、自宅のある街へ戻れることになったことは、ガザの人びとにとって、一息をつける機会となったことは、確かです。

ガザ地区北部への移動が許可されると、すぐに幹線道路は人の波で埋め尽くされました。避難してきた道をまた徒歩で戻る人の中には、疲れと空腹で座り込む高齢者や障がいを持つ人の姿もあります。

たとえ自宅がなくても、もうこの地を離れない、ここで生活を立て直すのだ、という決意を語る姿が、中東のメディアでは流れています。パレスチナ人は不屈だ、と彼ら・彼女らは訴えます。

しかし、東日本震災の 1,400 万トンとも 2,000 万トンともいわれる量をはるかに超える 5,000 万トンに達するというがれきを前にして、途方に暮れている人も多いのです。ガザ地区の面積 365 平方キロは、岩手・宮城・福島 の 3 県の面積のほぼ 100 分の 1 です。

ここでちょっと触れておきますが、偶然にも名古屋市の面積約 326 平方キロメートルは、ガザ地区のそれ約 365 平方キロメートルとほぼ同じ、名古屋市の人口約 233 万人は、ほぼガザ地区のそれと同じなのです。ただガザ地区には農地がかなりあり、密集した難民キャンプが点在することで、世界一人口密度が高い地域のひとつと言われてきたのです。

がれきの下には、まだ行方のわからない人たちが埋もれています。がれきをどかさうとしても、不発弾があちこちに隠れています。昨年 10 月から 11 月にかけて、名古屋市東区や中区丸の内では不発弾が見つかり、一時避難や交通規制が起きましたが、何百倍もの規模でそうした事態が起きているのです。過去の戦争をみても、これだけの市民生活空間の破壊は「ヒロシマとナガサキ」だけだ、と言う人もいます。

そして、実際に、広島型原爆の 5, 6 発、あるいはそれ以上の威力をもつ兵器が投げられたと指摘されています。名古屋市に原爆が 6 発も落とされたら、どうなるでしょうか。

230 万人以上と言われているガザの人口に対して、医療施設はほとんど破壊されてしまっています。機能している総合病院はほぼ、ありません。2023 年 10 月以来、小学校から大学までが機能停止となり、小中学校での学びの機会は奪われたままです。大学のすべてのキャンパスががれきになってしまっています。もちろん上下水道や電気といったインフラもほとんどがなくなってしまいました。この被害の中で、障がいを持つ人たちや高齢者は、最も厳しい状況に置かれています。

しかし、ガザの人びとはうなだれて、ただ状況を受け容れているわけではありません。

病院がなくなっても、残っていた機材を集めて、緊急医療が続けられています。学校が窮

屈な避難所になってしまっても、教員たちはテント村で寺子屋を始めています。私たちの現地スタッフも燃料の配給を確保し、給水車を避難キャンプへ走らせ、送金した財源でただお腹を満たすだけでなく「おいしい」と思える食事を提供しています。ガザの人びとは自分たちは「挫けない」「ここを動いたりはしない」と胸を張ります。

つい「緊急人道支援」は、戦争被害に遭ったみじめでかわいそうな人たちへの施しのようないメージがつきまとい、寄付を募る方もそうしたニュアンスに訴えがちです。しかし、ガザのパレスチナ人は、施しを求めているのではない、人間としての尊厳、あたりまえの人間としての平等を求めています。「なぜ、世界は我々をこんな理不尽で差別的な状況に甘んじさせるんだ?」「なぜ、世界は、私たちの人間性を尊重してくれないんだ?」というのが、彼らの本音です。

障がいを持つ人びとや高齢者、妊産婦など、脆弱性を社会的にもつ人びとのために、現地の NGO も奮闘しています。障がいを持つ子どもと健常者の子どもがともに学ぶインクルーシブ教育も避難先で行われています。病院が機能停止に追い込まれても、各地で妊娠している女性や新生児のケアを行うクリニックが起ち上がっています。

日々の生活を成り立たせていた安全な水へのアクセス、電力や燃料、そして最低限の食料確保も、戦争事態だけでなく、検問所の恣意性、官僚主義によっても阻まれてきました。そんな時に、ガザ市民を代表して NGO のコーディネーターや人権活動家は声明を出し続けてきました。私たちは最大限それに応答しようとしてきました。また私たちの呼び掛けに、多くの日本に暮らす市民が手を差し伸べてくださいました。現地スタッフもビニールテントで

暮らしながら、懸命に働いてくれています。

停戦がいつまで持つのか、第二段階へ進めるのか、トランプ大統領の「ガザ住民を立ち退かせて、アメリカがガザを管理する」という発言に耳目が集中する中、がれきとなった自宅にテントを張るしかない人びとは、自分たちがふたたび「忘れ去られてしまう」ことを危惧しています。人間は、忘れっぽく、メディアも SNS もその時点での流行りや優先順位を追ってしまいます。しかし、今回のガザの破壊はパレスチナ史上、第二次大戦後の世界史史上でも、あまりにも莫大なものです。再建・復興といっても、この先の見通しが立たないほどです。

そして、これはパレスチナを分割するとした国際連合決議の大きな失敗の結果であり、80年近く解決を先延ばしにしてきた問題を、最も悲惨なかたちで世界に突き付けた事態です。国連パレスチナ難民救済事業機関＝UNRWA は単に難民に人道支援する組織ではなく、パレスチナ問題が解決を要する課題であり、その解決＝難民の帰還まで暫定的に面倒を看ます、という世界の約束ごとなのです。NGO が束になっても、他の国連機関にも、UNRWA の肩代わりを務めることはできません。

私たちの課題は、たくさんあります。できることは、少なくありません。

私たち NGO は、彼らの努力を支え、活動を通じて、子どもたちや社会的に最もしわよせを受ける人びとに「世界は見捨てていないよ」というメッセージを届けます。また政治に働きかけ、パレスチナ人の尊厳を守らせ、自決権を支持させ、国際的な約束である UNRWA の存在を消させないことが根本的に必要です。

その他、さまざまな運動が始まっています。

情勢は、もうひとつのパレスチナ＝被占領地域である「ヨルダン川西岸地区」でも極度に悪化しつつあります。当地でも教育支援活動を行っている立場として、重大な関心を寄せつつ、現場と連絡しながら、できることを模索、追及していきます。

ぜひ今後とも、パレスチナとそこに生きる人びとに心を寄せていただき、ご支援をお願いします。ともに展望を共有して参りましょう。

ありがとうございました。

特定非営利活動法人 パレスチナ子どものキャンペーン

北林 岳彦 （2025 年 2 月 9 日）